



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

4. 岡山県におけるモモ胴枯細菌病発生の特徴と診断指標

[要約]

モモ胴枯細菌病は、2～5年生の若木で、夏季の異常高温を伴う干ばつや多雨の後に多く発生する。現場での簡易診断では、早期落葉、樹皮表面の樹液やヤニの漏出痕、樹皮下のアルコール臭及び形成層の褐変などの症状が本病発生確認の指標となる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

県内の一部のモモ園では、若木を中心にモモ胴枯細菌病（急性枯死症）が発生し、問題になっている。本病は診断の指標が確立されておらず、生産現場では本病の診断に苦慮している。そこで、本病発生の特徴を整理し、診断指標を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 平成28年から令和6年にかけて岡山県でモモ胴枯細菌病と診断された樹では、発生の助長要因として「樹齢」、「8月の無降雨日数」、「6月又は7月の最高気温35℃以上かつ無降雨の日数及び6月又は8月多雨日数（日降水量20mm以上）」と関連性が高い（データ省略）。
2. 発生は1～8年生までの樹でみられ、特に2～5年生の若樹での発生が多い（図1）。
3. 本病と診断された樹では、早期落葉後に枯死している場合が多く、樹皮表面に赤褐色の樹液及びヤニ（樹脂）の漏出痕、アルコール臭及び形成層の褐変が高頻度に認められる（図2）。
4. 3. で示した本病の特徴5項目（早期落葉、樹液の漏出、ヤニの漏出、アルコール臭及び形成層褐変）のうち、3項目以上認められた場合、本病原菌の検出率が高い（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本病は排水性が悪い圃場及び樹勢がやや強い～強い樹で発生が多いため、本成果の診断指標と組み合わせて診断を行う。
2. モモ胴枯細菌病と診断された樹は速やかに伐採及び抜根し、適切に処分する。抜根時に脱落した残根にも病原菌が残存するため、できるだけ丁寧に残根を除去する。
3. 残渣の分解を促進するため、残根除去後は地温が高いうちに天地返しを行う。地温が低い12～3月は、残渣の分解がほとんど進まず病原菌が残存する恐れがあるため、発生翌年は跡地への苗木の植え付けを避ける。
4. 透水性が不良な圃地では本病の発生リスクが高まるため、暗きょや明きょの施工、耕盤層の破砕などの排水対策を実施する。
5. 特に若齢期での発生が多いため、地力の高い圃場などでは堆肥の多投入や過剰な施肥などを避け、樹勢を強くし過ぎないように管理する。



[具体的データ]

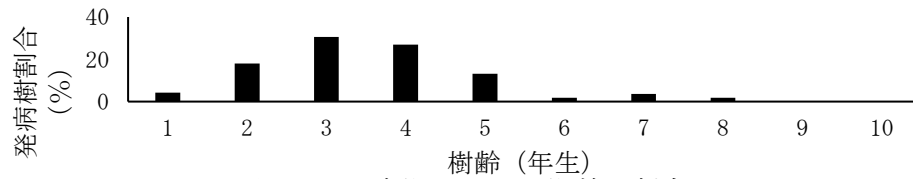
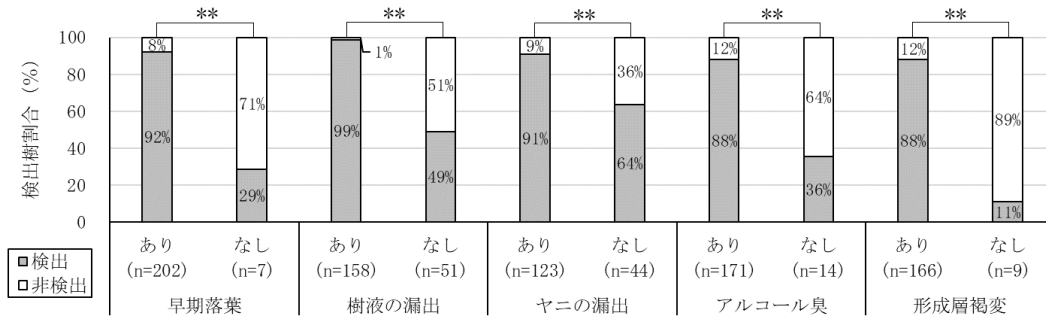


図1 発病樹における樹齢の割合

注) 調査年：平成28年～令和6年、調査樹数172本



外観					
症状の特徴	夏季～秋季にかけて早期落葉し、枯死する。	幹や地際部から赤褐色の樹液の漏出や漏出痕がみられる。	樹皮亀裂部から、赤褐色、玉状のヤニ（樹脂）の漏出がみられる。	樹液、ヤニ、主枝断面及び形成層からアルコール臭を発する。	主枝の形成層（樹皮下の皮層部）が褐変する。

図2 症状の特徴及び症状ごとのモモ胴枯細菌病菌の検出状況

注) Fisherの正確確率検定による。*: 有意差あり (p<0.01)

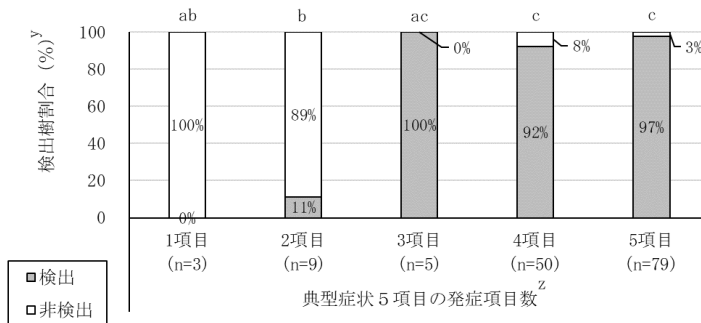


図3 症状の特徴と胴枯細菌病菌の検出状況との関係

* 樹ごとに症状（早期落葉、樹液漏出、ヤニ漏出、アルコール臭及び形成層褐変）を観察し、発症項目数を調査した

* 異英小文字間にはHolm法の多重比較による有意差あり (p<0.05)

[その他]

研究課題名：果樹等の幼木期における安定生産技術の開発

（急性枯死症状の発生要因の解明と対策技術の開発）

予算区分・研究期間：受託（農林水産研究推進事業（委託プロ））・令和2～6年度

研究担当者：苧坂大樹、桐野菜美子、川上敦子、吉村諒介、佐々木郁哉、河村美菜子、大家理哉、森次真一、水田有亮、寺地紘哉

関連情報等：1) 試験研究主要成果、[令3 \(25-26\)](#)、[令4 \(33-34、35-36\)](#)、[令6 \(27-28\)](#)

2) 果樹胴枯細菌病（急性枯死症）対策技術ガイドブック（2024年度）：果樹の幼木期安定生産コンソーシアム（2025.03）